

<書評論文>

性の歴史化と現在

Jeffrey Weeks,
Making Sexual History
(Polity Press, 2000)

西村菜美

はじめに

本書*Making Sexual History*は、ジェフリー・ウィークス⁽¹⁾による、1977年から1999年までの著作を再録したものである。ウィークスは自身ゲイ当事者であり、1977年に*Coming Out*を出版、以後、同性愛の社会史を中心に取り組み、フーコー以後の英米圏において、構築主義的立場によるセクシュアリティの歴史学的・社会学的研究を牽引している。邦訳された著作としては、セクシュアリティの構築主義的研究における論点をまとめた*Sexuality*がある。

本書に収められた論文やエッセイは、それぞれに書かれた時代も目的も異なる。だが、著者のいうように「われわれ自身がまさに性の歴史の作り手であることを再確認する」ための、「セクシュアリティの歴史を理解し作り直す手助けをするための取り組みの記録」と本書をとらえると、その時代やテーマの多様性が大きな意味をもつ。本書からは同性愛当事者の運動の現場に1960年代からかかわってきたウィークスの、現実的な関心と主張を読み取ることができる。

なお、今回本書を取り上げたのは、本書が1970年代から90年代までのセクシュアリティ研究をよくまとめた良書であり、日本で今以上に紹介されるべき本であると判断したためである。というのも、日本において欧米のゲイ・スタディーズおよびセクシュアリティ研究が導入されたのは1990年代になってからであり、それ以前の著作は、良書であっても邦

⁽¹⁾ 1945年～、現在ロンドン・サウスバンク大学教授。

訳されていない場合がしばしばある。本書はこの空白の年代の研究における主要な論点を広く拾い上げるものであると思われる。

以下、本稿の第1章では本書の内容を概観し、第2章でいくつかの論点への批評を試みる。

1. 性の歴史を作る

本書は3部構成をとっている。第1章ではセクシュアリティにかかわる研究者を紹介する。第2章では、セクシュアリティがたどった歴史的・社会的経緯を取り上げ、特に、20世紀のセクシュアリティ理解の経緯と、HIV/AIDSがセクシュアリティ理解に与えた影響を概観する。第3章では、セクシュアリティの「作り手」が取り上げられる。近年の「性的なコミュニティ (sexual community)」、コミュニティによるHIV/AIDSへの取り組み、非異性愛者による「選択する家族 (families of choice)」などの試みへと焦点をあてる。

1-1. セクシュアリティの研究者たち

第1章では、ハヴェロック・エリス、メアリ・マッキントッシュ⁽²⁾、デニス・アルトマン⁽³⁾、ギー・オッカングム⁽⁴⁾、ミシェル・フーコーの5人が取り上げられる。

マッキントッシュ、アルトマン、オッカングムはウィークスとはほぼ同世代の研究者である。その業績は、「われわれが同性愛を異性愛と区別し抑圧するのはなぜか」という問いに集約されるといってもいいだろう。フーコーもほぼ同じ世代ではあるが、並べてみると、エリスとフーコーが他の3人からやや浮いている印象を受ける。特にエリスはこの4人の中でただ1人、20世紀初めの研究者であると同時に、その主張の内容が大きく異なるため、違和感を覚えずにはいられない。

ウィークスがエリスを取り上げた背景には、エリス自身の生き方の面白さばかりでなく、

⁽²⁾ Mary McIntosh: 社会学者。業績は多くないが、1968年という早い時期に、*The Homosexual Role*において、同性愛の歴史的・社会的構築性に着目した研究を行ったとして、本書では高く評価されている。

⁽³⁾ Dennis Altman: 社会学者。3節で取り上げられた*Homosexual: Oppression and Liberation*では、1969年に起きたストーンウォール暴動から始まるアメリカのゲイ解放運動について論じている。ウィークスはこの本の重要な論点として、同性愛／異性愛、という区別そのものが意味をなさなくなることが運動の最終目標である、という主張を高く評価している。本書に収録されたエッセイは、この本が1993年に再版された際の前書きとして書かれたものである。

⁽⁴⁾ Guy Hocquenghem: 小説家、エッセイスト。4節で取り上げられた『ホモセクシュアルな欲望』では精神分析的な視点から、同性愛嫌悪について分析した。

彼の同性愛観や性別観を20世紀後半までの性の自由主義的な考え方の縮図としてとらえられる、とするウィークス独自の解釈がある。そのため、エリスを取り上げ、続いて残りの3人を参照することで、性に関する知的取り組みの軌跡を追うことができるとウィークスは説明している。

では、フーコーはウィークスにとってどのような存在なのだろうか。フーコーは周知のとおり『性の歴史』第1巻(1976)によって性が歴史的・社会的に構築されたものである、という考え方を基礎づけた。ウィークスは、これをフーコーただ1人の特別な業績としてではなく、先行する、そして同時代の、研究の流れの中に位置づけられるものとして扱っている。それは、以後のセクシュアリティのとらえ方を根本的に転換したこの業績が、同じ時代の全ての研究者によって作られたことを示そうとすることでもある。

1-2. HIV/AIDSとセクシュアリティ

第2章では、セクシュアリティの規制にまつわる話題が取り上げられ、特に、エイズとの関連からセクシュアリティが分析される。

6節は、本書を読む上での前提となるであろう、フーコー以後のセクシュアリティ研究をたどり直す。1970年代以後、フーコーの影響を受けて、性・セクシュアリティは社会的・歴史的に構築されたものと考えることが可能になった。ウィークスはこのフーコー以後のセクシュアリティ研究を「新しい性の歴史 (new sexual history)」と呼び、以下の3点で評価する。まず、セクシュアリティを、自然に縛り付けられたものではなく、社会的・歴史的に構築されたものととらえることで、あらゆる分野から批判的に分析可能にした点。そして、性的・道徳的な多様性を過去にさかのぼって検証することを通じて、現在の多様性が受け入れられるようになった点、現在あるカテゴリに介入して脱構築すると同時に、再構築を可能にした点である。

7節では、エイズ危機を取り上げ、HIV/AIDSへの対応をセクシュアリティの歴史の中に取り込み位置づけることを試みている。エイズは1980年代の初めには社会の周縁にいる人々の病気と関連づけられたのであるが、とりわけセクシュアリティとの関連でいえば、1980年代中盤に、タブロイド紙などで「ゲイの病気」といったように扱われた。それは偶然、アメリカとヨーロッパにおいて最初の患者が現れたのがゲイコミュニティの中であったためで、実際には「同性愛者の病気」などではなかったのである。さらに、最初の感染が明らかになってから、1980年代中盤にエイズが異性愛者のコミュニティに流れ込み始めるまで、エイズに対する公的な支援は行われなかった。ウィークスはこの背景として、

「同性愛者」という、嫌悪されるカテゴリが存在することによって「正常な」人々が定義されていることを指摘する。

8節では、ウィークスが「完結していない革命」と呼ぶ、20世紀のセクシュアリティの変容に評価を与える。セクシュアリティの危機、性に関連する病気、性的児童虐待、産児制限、性的アイデンティティなどの、現代的と思われる性まつわる議論は、18世紀～19世紀から変わらず存在している。だが、20世紀に入って、性の世俗化と自由主義化が進行し、これらの動きを受けて徐々にわれわれは多様性を受け入れざるを得なくなりつつある、という。一方、これらの動きに対しては未だ根強い反発があり、その受け入れ難さを、エイズ危機の際のバックラッシュを取り上げて論じる。

1-3. 性的コミュニティ・家族

第3章は、特にウィークスが個人的に関心をもっていると思われる、セクシュアリティに関する集団的取り組みを取り上げる。9節・10節では、「性的コミュニティ」の発想が扱われている。ウィークスは「個人以上、国家以下の何ものか」としてのコミュニティの可能性を高く評価しており、9節では、性的コミュニティという発想を評価する。これは、集団主義にも、自己犠牲にも陥らないようなコミュニティへの挑戦である。性的なコミュニティには4つの役割があり、アイデンティティの焦点として、精神や価値の保管場所として、社会資本として、政治として、のコミュニティである。コミュニティという発想は、フィクションであるが、社会的によりよい方向へと変化するための社会的な行為体としての可能性を作り出す、必要なフィクションであるという。

また、10節では、HIV/AIDSへのコミュニティを基盤とした対応について論じている。これは、HIV/AIDSへの対応組織の「脱ゲイ化」と「再ゲイ化」の過程についてまとめたものである。イギリスでは初期の重要なHIV/AIDSへの対応がゲイ男性のコミュニティから起こり、政策指針の決定において重要な役割を果たしている。また、コミュニティを基礎とした活動が、ゲイ男性による自発的活動に支えられていたにもかかわらず、初期のHIV/AIDS関連ボランティア組織においては、ゲイ向けの活動をしていることを隠す傾向があったことに言及し、その背景にあるホモフォビアを明らかにしている。その後のエイズ感染の拡大により、エイズが全ての人の問題となったことで、事態は変化し、コミュニティの多様化と、必要なサービスの専門化の点から、そのようなコミュニティの「再ゲイ化」が起こっていると指摘する。この節では、コミュニティの存在によってHIV/AIDSに迅速な対応がなされたことを評価するとともに、特定のターゲットをもつコミュニティこ

そ、ニーズに合ったサービスを提供できるとして、高い評価がされている。

11節は、非異性愛者による家族への試みを取り上げる。1980年代から起こった新たな状況による、家族と親密性をめぐる今までにない状況の出現がこの節の話題である。アイデンティティ・コミュニティ・選択が、非異性愛者の生活の鍵を握る用語である。

その新たな状況とは、ひとつには同性愛の、単なるセクシュアリティとアイデンティティとして以上の側面にまつわる、すなわち、人間関係や、親密性、パートナーシップや結婚に関連した新しい言説の発生であり、もうひとつには、社会的アイデンティティの流動化（ギデンズが論じる「親密性の変容」）と、誰をどのように愛し関係するかが自分自身と自分の生活を決定する、という現代の状況である。非異性愛者へのインタビューからは、伝統的には家族についていわれてきたような価値や居ごちのよさが友人関係に見出されていること、自分自身や自分自身の生活を自分の手で創り出すこと、自分自身の選択の価値を認めることによって、新しい可能性が生まれることなどが指摘されている。このような、「選択する家族 (families of choice)」の出現によって、これまでの伝統的な異性愛の家族に与えられてきた権利との関係で新たな問題が生じている。それは、同性カップルによる養子縁組や、代理母による出産の権利を認めるかどうかから、健康保険や年金の権利、抵当権や銀行の共同口座まで、あらゆる側面において異性愛者のカップルと同じ権利を認めるかどうかといった問題である。

12節では、19世紀末と20世紀末のセクシュアリティをめぐる議論を比較した上で、根本的な問いは変化していないことが示される。その上で、19世紀から20世紀に変化が起こったのは、ひとつには「グローバリゼーション」、脱伝統化・個人化・アイデンティティの創造であり、もうひとつには、「親密性の変容」、家族やジェンダー関係をめぐる状況の変化とセクシュアリティの多様化であると論じ、親密性の変容とグローバリゼーションが同時に働きつつある現状において、性の歴史を全体として理解する鍵となる方法を作り出してゆくべきなのは、レズビアンとゲイである、と論じている。われわれはそのような社会の変容を毎日の生活の中で経験しており、生活の中での、日々の実践を通じてそこに既にかかわっているとウィークスは指摘する。そして、そのような日々の性の歴史の連続的な構築と再構築を認識することで、危機をよりうまく乗り越えてゆくことができると、ウィークスは本書を終えている。

2. 性の歴史的・社会的構築からその先へ

以上、本書の内容を概観してきた。以下ではこれらのウィークスの議論を踏まえつつ、

これから課題となるであろう点を二つに絞って述べる。それは、ウィークスが「同性愛」、特に「男性の同性愛」を主要なテーマとして、研究を行ってきたことによる限界でもあるだろう。だが、それは決してウィークスやその他の研究者によって積み重ねられてきた知見が無意味だということではない。それらを批判的に振り返り不足を補ってゆくことが、今後の課題だといえるだろう。

2-1. 「構築」と「身体」をつなぐ

本書はさまざまなテーマを扱っているが、それらの縦糸となるのがセクシュアリティの歴史的構築という視点である。19世紀末から20世紀初頭の、ハヴェロック・エリス、マグヌス・ヒルシュフェルト、ジグムント・フロイトといったいわゆる性「科学」者は、性の「真の意味」を、子どものセクシュアリティの経験や両性の関係、生殖細胞、ホルモン、染色体、性本能などに求めようとした(Weeks 1986=1996:15)。ウィークスは性科学に一定の評価を与える一方で、このような「性の伝統化」に加担する論点のうち、特に生物学的な根拠づけを仮想敵としてきた。

1970年代に起こった最も根本的なセクシュアリティ研究の視座の転換として、構築主義は大きな意味をもつ。しかし、一方で、構築主義は一步ゆきすぎれば、あらゆるものが歴史的・社会的に構築されるという社会本質主義に陥ることも、多くの研究者の指摘しておりである。ウィークスの議論では、構築主義的な発想に根ざすあまりに、人間が事実として性をもつことが、保留されたままになっているように思われる。それは、生物学的・医学的性という問題よりも、同性愛に与えられたスティグマを消すことの方が、当事者にとって切実に要請されていたためでもあろう。

だが、セクシュアリティが歴史的・社会的に構築されたからといって、われわれが性をもつという事実を、セクシュアリティ研究とは無関係なものとして切り離してよいわけではない。この点に十分に留意して、今後のセクシュアリティ研究は行われてゆくべきであらう。

2-2. コミュニティの異質性をめざして

もうひとつ、本書の横糸ともいえる重要な論点がある。性的コミュニティの発想であらう。ウィークスは9節で、コミュニティを、人はつながりを持ち、何かに所属しなければならないという提案をするものであり、バウマンの、コミュニティとは「ポストモダンの思想

においては、理性と普遍的な真実に置き換わるものである」という主張に賛同している。コミュニティはフィクションなのであるが、必要なフィクションであり、個人はコミュニティを通じて自分のアイデンティティや所属の感覚を得る、すなわち、社会的世界の理解を構築すると位置づけている。ウィークスは、HIV/AIDSの文脈において使われる異性愛者の「コミュニティ」という表現を自家撞着と表現し、一般的な異性愛者のコミュニティは存在し得ず、コミュニティはスティグマ化された者のためのものである、という表現をしている。

ウィークスがいうように、コミュニティが、スティグマ化されたアイデンティティをもつ人々に、そのアイデンティティを肯定し、所属の感覚を与え、と同時に社会運動の母体として個人ではできない成果を上げてきたことは否定できないであろう。しかし、ウィークスが論じる「コミュニティ」は、例えば「ゲイ男性による」「ゲイ男性のための」コミュニティ、というように、コミュニティ内の同質性に基づいたコミュニティを想定しているように思われる。そのような同質性が保障された（実際には、そのように見えるだけなのだが）基づいた相互理解は、現在よりも性的マイノリティへの認識がなかった時代には、一定の有効性をもつものであったのだろう。だが、そのようなコミュニティの概念の危険性は、十分に認識しなければならない。ひとつは、それがコミュニティ内部だけでのアイデンティティとなってしまう危険性である。特定のスティグマ化された人による特定のコミュニティの、その内部で理解しあい、アイデンティティが肯定されたとしても、それはコミュニティ内部だけでの達成でしかない。

大切なのは、アルトマンが述べたように、異性愛／非異性愛というような分割線が、最終的に意味をなさなくなるような、多様性の達成なのではないだろうか。そのためには、「同質な」「性的マイノリティ」だから理解しあえるという前提に立ってしまっただろう。それは、もうひとつの危険性、すなわち「同質性に基づいた相互理解のしやすさ」という発想に陥ってしまう危険性につながる。

イヴ・K・セジウィックはゲイ／レズビアン運動において「性指向」の概念が無批判に受け入れられ、遺伝子的な性別・パートナーの遺伝子的性別・パートナーのジェンダー区分・自分の性的指向についての理解など性的指向を構成するさまざまな次元が相互に整合的に組織され、均質な画一的な全体を構成することを当然に考えていると批判する（セジウィック 2000: 38-39）が、実際には、「ゲイ男性」「レズビアン女性」というようなカテゴリだけでは拾いきれない、さまざまな要素から、セクシュアリティは構成されているはずである。だからといって、同じような経験、同じような感情、といった共通性を元にして相互理解や安心感を生み出す、というコミュニティの機能それ自体が一切否定されるべき

ではないだろう。問題は、そうではない場面において、つまり、自分とは異質な存在、異質なコミュニティと、どのように相互理解を作り上げるかである。それはとりもなおさず、全ての人が自分とは異質な側面をもつという、カテゴリの脱構築とセクシュアリティの再構築へとつながる発想でもある。

おわりに

ウィークスは、「性の歴史の理解を通じて現在へ」というスタンスを強調する。性の歴史は、ウィークスが述べるとおり、単一ではない多数の歴史 (histories) であり、埋もれてしまっているそれらひとつひとつの歴史を掘り出してゆくことは、重要な作業となるだろう。だが、それら「ひとつひとつ」とは、決して同性愛、異性愛、ゲイ、レズビアン、といったカテゴリごとに分かれたものではない。今必要とされるのは、それらのカテゴリに分断された歴史を検証し直し、それぞれが一枚岩で均一なものではないことを示してゆく研究ではないだろうか。

[文献]

セジウィック、イヴ・K.、竹村和子・大橋洋一訳、2000、「クィア理論をとおして考える」『現代思想』vol.28-14: 30-42.

Weeks, J., 1986, *Sexuality*, Ellis Horwood Ltd. (=1996, 上野千鶴子監訳『セクシュアリティ』河出書房新社) .

(にしむら なみ・修士課程1年次)